

<ワン・ポイント・レクチャー> こども未来コース(応用編)

第1回:子どもを信じるとはどういうこと?

乳幼児は、自らの命を託している存在としての保護者に対しては全幅の信頼を置きます。もちろん、基本的には保護者もわが子に対しては愛を注いでいるはずですので、このような親子間においては“愛着”というものが形成されます。

この愛着は、継続的に愛され、大切にされることで深まる情緒的な絆のことをいいますが、残念ながら、どの親子関係においても愛着が形成されるとは限りません。とは言え、愛着形成は子どもにとっては生きるため、生き延びるための切り札なんです。それは、愛着が深まり、情緒が安定することで人への信頼感が育まれます。結果として、その後の人間関係の広がりや深さ、経験の量に大きく影響を与えることになるからなんです。自分の関わり方がもたらす“コトの重大さ”を、保護者はもっと強く認識して欲しいと思います。

さて、保護者は、子どもが成長するにしたがっていろいろなことを子どもに求めるようになり、それが満たされる限りにおいては子どもに愛情を向け(時に過保護化し)ますが、そうでない場合には子どもに期待をしない、当てにしない、信頼しないという態度をとることがあります。ところが、「この子は勉強も運動もできない、才能がない」と思い、期待することなく接していれば、その通りになる(ピグマリオン効果)と言われているのはご存知ですか？

とは言え、信じ、期待し続けること。簡単なようで、実はすごく難しい事だとは思いますが。冷静な心で改めて子どもの可能性を「信じる」、最後まで子どもの可能性を信じ続ける(子どもにとって親は最後の砦)。それが一番大事なことなんです。

子どもの能力を伸ばすも、ダメにするのも、結局は周りにいる大人が子どもを信じ続けることが出来るか(でも、信じる事が出来ないような子どもにしたのは、子ども自身のせいではないですよね?)だと言えます。